

時空融合後から2ヶ月が経ったアメリカ。そのある場所、暗い部屋にて。

「貴方のその技術...このままのアメリカでは地に埋もれてしまう。 どうだろうか。 この私に任せてくれないだろうか。」

「...。」

女性と男性が正対して会話をしている。

「私には、これを更に発展できるだけの技術がある。知恵もある。そして知識もだ。」

「...。」

と、いうよりは女性が男性に売り込んでいる...ようではあるが。

「君の名前を聞いていなかったな...名前は...。」

「これは失礼。私はイハビーラ=メッコー。医学博士号を保持している。」

「ふむ...君には暗い情念が見える...。」

イハビーラは眉間に皺を寄せる。

「いきなりそれか？」

「だが...わしの子供といてもいい...このプログラムを預けるには調度よからう...。受け取るがいい。」

そういつて男性はイハビーラに5枚セットのDVDを手渡す。

「...これは全部で一つかな？」

「違う。バージョン違いと思って欲しい。」

イハビーラはそういわれたあとラベルに目を通す。

Ver 1 NN、Ver 2. IF、Ver 3. NCT、Ver SP 1 DS、Ver SP 2 SH  
...以上5種。

「これに違いはあるのかね？」

「そうだな...合体法則の違いが大きいかな...。」

「ほう。」

「またバージョン違いによっては呼び出せるものの能力にも影響がでる...。」

「平均して強い悪魔を呼び出せるのはどれになるのかな？」

「Ver 3 NCT...そう書かれているものだ...より...生きているものらしく...成長する...。」

「ほう...。」

「ただ、Ver SP 2は...モバイルなどの携帯用端末でも合体が可能...だ...手軽さでは...それだろう...。」

「承知した...まあ、詳しい内容はおいおい使いながら研究させてもらおう。」

## SSFV Outside Story

### 新世紀アリス伝 / Face Earth

#### Ep01. 神秘学最大の悪夢、降臨

#### Part.A Date : 全てが始まる前の話

迷宮の奥底。

時間凍結されたランダム精製ダンジョン。

だが、今はその時間凍結は解除されている。その奥底にまで歩いてきた一組の男女がいた。

「...あのときのままだな。ここは。」

「そうだね...。」

暗い迷宮に二人の足音だけが響く。

そして、一番奥の広間にたどり着く。

「...来ましたよ。甲斐那さん。刹那さん。」

その広間には先客が二人、床に倒れ伏していた。すでに息はない。

「ミュウ、準備はいけるか？」

「うん。秘儀中の秘儀も習得したしショートラムで手に入れたこの道具もあるから。」

女性の懐から同じ品が二個でてくる。よくみると「蘇生セット」と、書いてあった。

「じゃあ、やってみるよ...えい！」

蘇生セットと書かれた道具を手にして、まずは倒れている二人のうち、黒い長い髪が印象的な女性の側に立ち、気合一ついれる。

「 蘇れ...式堂、刹那！」

蘇生セットと書かれた道具が音も無く崩れる。

黒髪の女性　すでに亡くなっている　の体がほのかに発光し...その光が収まると、彼女の胸が驚く無かれ、鼓動にあわせ、呼吸にあわせ上下し始める。

そして、わずか一分後に女性は目を開けた。

「...ここは...」

黒髪の女性に男性が飛びつき抱きしめる。

「刹那さん！」

「...え...」

刹那と呼ばれる女性は飛びついてきた男性に目をやり、すこし逡巡した後、その男性の名前であろう名を口にする。

「カイトさん？」

「ええ、そうです...カイトです...刹那さん。」

「...すこし育ちましたか？」

「はい...。」

女性はカイトから身体を離すとゆっくりと立ち上がる。

「私は...死んだはずでは？」

「うん。死んでたよ。」

女性 刹那の疑問に答えるようにカイトとともにやってきた女性が答える。

「ミュージエルさん...」

「私が生き返らせたんだけどね。」

にこ、と女性は微笑んだ。

「...幼さが消えて...美人になりましたね。」

刹那の言葉により一段微笑をつよくなる女性。

「あのときは申しわけありませんでした。そして、今回もまた...」

「あ、ちょっと待って。まだあと1人...残ってるから。」

女性 ミューゼルの言葉に頷く刹那。3人は残る一人の側にたつ。

ミュージエルは残った一つを手にして、再び蘇生の儀式にはいる。

「...あれから幾年の時間がたったのですか？」

儀式の最中、刹那がカイトに訪ねる。

「あれから...俺たちは2年の時間がすぎています。刹那さん達がミュウをこの迷宮に連れ出してからなら5年です。」

「僅か二年で...蘇生の儀式を習得したんですか？」

「ええ...ミュウは素質があったみたいでして...。」

「魂の器というのは...伊達ではなかったということですね。」

「まあ、そういうことになります。もっとも変にハイテンションなところのある神様にあったこともあったんですが。」

「ハイテンション？」

「マーティスとミラとかいう二人の神様で...」

カイトがそこで言葉を切る。儀式が終わったのだ。

「...ここは...」

「甲斐那さん！」

カイトは男性 甲斐那に飛びつく

「む...カイトか...？ は、ラガウリはどうなった、刹那は！？」

甲斐那は首を回し部屋を見渡し…。

「…刹那。」

「兄様…。」

カイトはそっと甲斐那から離れ、替わるように刹那が甲斐那の身体を抱きしめる。

「刹那…身体はいいのか…？」

「おかげさまをもちまして。ミュージルさんのご尽力のおかげです。」

「そうか…カイト、すまない。」

刹那が抱きついている為、頭をたれるだけで礼の替わりにする甲斐那。

「さて…そろそろ、帰ろっか、カイトくん。」

「ああ。…ラガウリはいないか。まあ、安心」

突如、迷宮が揺れ動く。

「地震か!？」

「揺れそのものは大きくないが…長い。崩落に気をつけろ！」

4人は手を取り合うと出口に向かい走り始める。

「まだ揺れてる…カイトくん、この地震、変だよ!？」

「ああ、しかも揺れがひどくなりつつある…」

一行は出口にたどり着く。

「あとはテレポートで出る。行きましょう。」

「わかった。」

カイトの言葉に甲斐那はうなずく。そして4人は出口に身をおどらせたのだ。

## Part.B Date: 02. 04/15

夜の公園。

そこに一組の男女が居る。

夜もふけてきたところにいる 夜の逢瀬と思い勝ちではあるが、二人の間にあるのは違う緊張に包まれている。

見るものが見ればその緊張はなにかわかるだろう。

戦いの前の緊張感である。

「鏡花、そっちはどうだ？」

「準備OK。チロもセットアップしたわ。」

「ようし…じゃ、いくぞ」

「ええ、亮！」

二人は夜の公園を歩いていく。

「今回の仕事の再確認。」

「公園で見かけられた小鬼の始末。数は多くても3匹。」

亮の言葉に鏡花がさらさらと答えていく。

「ちなみに私が読んだところからだと餓鬼ってところね。」

「て、ことは...あれがそうか？」

亮の指差した先に明らかに人とは違う姿がある。

「よね...典型的な餓鬼だけど...」

その餓鬼はケタケタと笑いながら踊りを踊っている。

「みょうにファンシーなやつだな。この最近囁かれ始めてるデジタルデビル系か？」

異世界の融合により「悪魔」「神」「天使」と呼ばれるような存在が出現したという事は融合から1年が経った現在、神秘学を嗜む者 とくにゴーストスイーパー関係 にとって数種類の系統に分けられ始めた。

一つ目は真正神/魔族。正式名称はまだきまっていないが、GS世界に近いものたちで「神話の世界」の存在である (from ゴーストスイーパー美神)。

二つ目は死徒。一般的に呼ばれる「吸血鬼」である。もっとも死徒の力はピンキリが激しく真祖や始祖に数えられる高位の死徒ともなるとそんじょそらのGSでは返り討ちに会うだけである (from 月姫/きのこワールド)。正確には悪魔や神と呼ばれるものとは違うが、「伝統的な吸血鬼」というジャンルから悪魔関係にカテゴリーされている。

三つ目は今現在は幽魔とよばれるモノ。基本的には全く見えないもので、見えない分においては何ら危害を加えないが、見えるようになる(もしくは見えるものと一緒に居る)と危害を加えるものに成り代わる。実際は目に見えなくても何らかの悪さを受ける可能性があるのだが、彼らの性質的に襲われにくい。ただしこの系統の上位は人間社会に深く関わりそれなりの知名度をもったものになっている or 入れ替わっていることがあるため対処しにくいパターンでもある (from SinsAbell 設定的には他にも似た作品があるため基本的には総称)。

四つめはデジタルデビル。一番、出会う確率が高くそして性能差というものに個人差が現れるものである。そしてなによりも人に使役されていることが多い。しかし使役されている場合は隠れて使う事が多く、今現在人間に対し何らかの干渉を行なうのはデジタルデビルの野生化したものである。なお、出現時には魔界化と呼ばれる特殊現象を起こす事があり、その場合は魔界化された区域から脱出することができれば安全である。ただし、大元のプログラムバージョンによってこのあたりに差違が生じている(当方が扱うのはソウルハッカーズ&夜想曲系統にします。それ以外のバージョンについては誰か適当に使って)。2年目の現在ではユーザーが少ない事から日本連合政府に詳しいことはわかっていない。

このデジタルデビルはアメリカ産なのだが、アメリカではスポイルされてしまう(キリスト教を国教としていることもあり、悪魔を使うということに嫌悪感があるのに加え、最大の敵であるムーに対し効果的に用いる事はできないという判断があった。なにより神秘学に相応する技術のため、正気を疑われるのである)。

だが、裏ルートから入手した者の手により広がっている。特にエマーンの弱小ハウスの幾つかは本プログラムを入手し、今現在活用法の研究が始まっている。そう、自ら武器を持ち戦う必要が無い為に彼らに一番マッチする存在といってもいい。

エマーンが本プログラムを正式採用 稼働させれば神秘学では独占に近い状況にある日本連合に対し一つの外交カードを保有することになるだろう(from 真女神転生シリーズ)。

5つ目は妖怪。人の思いが産み出したもの。そのなかには神様そのものが存在することが知られている。

一つ目の真正と同じ、否、それ以上に神話に近い存在でしられており、神話にたいし深い造詣をもてば対処法もわかってくる。神や悪魔といったもの以外にも民間伝承や都市伝説のような存在も産まれており「世界中何処にでもいる」というのが日本連合に頭の痛い存在である(from 妖魔夜行)。

まあ、今現在はこの5種だがより研究や発見が進めば系統がよりわかれてくることであろう。

閑話休題。

「だとすれば厄介ね。まあ、餓鬼ならたかがしれてるでしょうけど。」

鏡花はそう言うと腕に巻いた蛇 チロという名前がある を励起状態にする。その身体に対し大きな羽のついた蛇。それが彼女の武器になる。

一方の亮も首にさげたお守りに手をあてる。

そして、そこから何かを引き抜くように手を払うと...その手には長い剣が握られていた。

「鏡花...いくぞ。」

「ええ。」

二人は一気に餓鬼との間合いを詰める。

「行け、チロ！」

蛇が羽をひろげ鏡花の腕から餓鬼へと真っ直ぐに向かっていく。

「貫け 2翼の槍！」

チロの羽が硬質の反射を帯びたかと思えば鏡花の腕から伸びた一筋の槍のごとく餓鬼の一体を貫く。その一体はその直撃によって体が崩れていく。

残った餓鬼は向かってくる亮にめがけ、鋭い鉤爪を揮う。しかし、亮はまるで軌道が事前にわかっていたかのようにその一撃をかわすと手にした剣を一閃する。

餓鬼は頭と身体の一つに分かれて地に伏せた。そしてそのまま灰となって崩れていった。

二人の実力もあるのだろうが、餓鬼といえども「生きている」もの相手を無造作に殺せる覚悟のほうこそ驚くべき事かもしれない。

「...3匹目はいないか。」

「...みたいね。」

亮と鏡花は周囲の気配をうかがう。

「...しかし、さ。なんか奇妙な感じしないか。鏡花。」

「そうね。　　しいて言うなら狭間に飛び込む瞬間ね。これは。」

鏡花の言葉に納得する亮。

と、彼らの視界にあまりにいびつな「それ」が目に入る。

その一部だけ景色が円を描きつつ歪んでいく。もしこの場に鷺羽ちゃんが居れば、居なかったとしても彼女謹製のセンサーがあれば彼女は手を叩いて研究資料としたであろう。

時空融合。

それはそう呼ばれる現象である。

もっともその現象自体を目で確認するという体験者は少ないが。

バン。

何かが破裂するような音とともに時空融合の現象は収まり、その場所には「融合の結果」が出現していた。

「...む。」

「あれ？」

「...夜のようなですね。」

「ここ...どこ？」

亮と鏡花の前に出現したのは二組の男女だった。

「...亮、どうしたらいいと思う？」

「とりあえず話してみる。」

「言葉通じるかしら？」

「...鏡花、彼ら『日本語』しゃべってるぞ。」

やや混乱気味のふたりに二組の男女のうちのあきらかに日本人ではない外国人だろうと思う髪の色がやってくる。もっとも髪の色を指摘すると鏡花の髪は地毛で金髪だが。

「えーと、すみません。ここ、どこでしょう？」

流暢な日本語、母国語でもないところまでのイントネーションも含めてしゃべることは出来まいというほどの完璧さで彼女は亮と鏡花の二人に尋ねてきた。

「え、ここは神奈川県大津名市ですが。」

亮の返答に付け加えるように鏡花がその後を続ける。

「日本国のね。正確には日本連合になるのかな。」

その答えに首をかしげる。

「え、日本国？大津名市？ えっと、舞幻学園ってわかるかな？」

女性の問い掛けに首を横に振る亮と鏡花。その後、彼女は自分の世界の国名なのだろう地名らしきものを列挙するがいずれも亮も鏡花も聞いた事の無いものであった。

そのやりとりを後で聞いていた残りの3名も一同困った顔になっていた。

「なんてこった...ダンジョンから替えれば全くの別世界とは。」

「いったい何があったんでしょうか？」

「わからんな...。」

うーん、と少し唸った 可愛らしい唸り方だったりする 桃色の髪の女性はその後と一つ手を叩いて提案する。

「とりあえず、自己紹介しておこうよ。名前をしらないと呼びにくいでしょ？」

その提案に一同頷く。

「じゃ、現地人からいきましょうか。」

亮が手を上げて始める。

「俺は羽村亮。高校卒業して今は退魔師みたいなことをやってる。」

そのあと鏡花が一步前に入る。

「私は七萩鏡花。亮とはクラスメイトだった仲で同棲中の仲よ。」

「おい、鏡花。そんな事いう必要はないだろう？」

「そう？ どのみち彼らの第一発見者としてこれから長い付き合いになるだろうと思ってのことだけど？」

鏡花のあとにつづくのは少しさえない風貌の男性。

「俺は相羽カイト。ま、あまり冴えない冒険者を元の世界ではやってた。」

つづき桃色の髪の女性。

「私は相羽 = ミューゼル = クラスマイン。カイトくんとは夫婦だよ。」

その説明に残った二人が咳き込む。

「...うわ、どうしたんですか？」

「いや、初耳だったものでな。」

カイトの驚きに若さのわりに渋みを背負った男性が答える。

「失礼、申しわけない。私の名は式堂甲斐那。で、こっちが...」

最後に残った鴉の濡れ羽のように黒髪を腰まで伸ばし、夜に映える白い肌の美人に全員目が向かう。

「式堂刹那と申します。」

軽く一礼する。

「私の妹になる。」

甲斐那がつけくわえるように話す。

「さて、自己紹介も終わったところで、亮に鏡花...だっけ？こっちの世界のこと...すこし教えてもらえないかな？」

亮と鏡花は四人にこの世界のことを教えていった。時空融合と呼ばれる現象が起きた事。その結果の話（「しかし、鏡花ちゃんと亮くんってコレットとカイトくんみたいな感じだよね。」「ミウ...まあ、俺も感じたけどさ...」）

そして今この世界に忍び寄る脅威 と、いっても二人は一般市民なので事情をよく知らない世間の常識レベルでしかない。すなわちムーの機械兵のことを話す。



「はあ、そりゃ大変だなあ...。」

「まあ、地球の裏側に近い位置での話だからこの国にその驚異がくるのは当面先みたいなんだけどな。」

「そうかもしれないが、なんかの対策は練ってるのか？」

「俺たちは知らないけど...国のお偉いさんがなにか考え...」

一同、会話と取りやめてある一点を凝視する。

「...あれはなにかな？」

カイトが亮に問い掛ける。

「餓鬼、と呼ばれるものだな。かなり弱い相手。」

「へえ...そのわりに凄いプレッシャーを感じるのは気の所為か？」

「亮...只の餓鬼、じゃあなさそうよ。」

彼らが見ている一点。そこには餓鬼が一匹。だが、その餓鬼から放たれる気は尋常のものではなかった。

「ふいふいふ...はははははは！！」

餓鬼は高々と笑い出す。

「素晴らしい。これは素晴らしい...魂の器とまではいかないが...私の復活には十分な身体ではないか！」

「「な！」」

亮と鏡花の二人が驚嘆の声を上げる。彼らの経験上、餓鬼がしゃべるということ 多少の会話は出来なくも無いがここまで明確に話せるものはいない はなかったからである。

一方で異世界組4人は臨戦体勢に移る。

「く...マジかよ...。」

「ラガウリ...」

ミューゼルの声に餓鬼は頷く。

「左様...お前たちに復活を一度は阻止されたラガウリ...我だ。そこの小娘と違い、この身体なら...む、この身体...」

自信たっぷりだった餓鬼の言葉からその自信が抜け落ちる。

「...なあ、亮。」

「なんだ、相羽？」

「餓鬼の攻撃方法は？」

「鉤爪による攻撃か噛み付き。」

「魔法は？」

「極稀に使うやつがいるが基本的には魔法は使えない。」

ここで4人、すこし苦笑する。

「ラガウリ...お前、今すごくヤバイ、と思ってるだろう？」

カイトの言葉に餓鬼 ラガウリは一步退く。

「く...まあいい、魔法を使えないことなど問題にはならん。我が力の恐ろしさ、お前たちに見せてやろう！」

ラガウリは一声咆哮を上げる。するといきなり餓鬼の身体が大きくなり、身長が人間ほどにまで大きくなる。

「みたか。これでこの身体の耐久性は大幅に上がった。これで相手をしてやろう！」

ラガウリはそういうが速いが一気に襲い掛かる。狙いはカイト。だが、カイトには当たらない。

「甘いぜ...はっ！」

追い討ちを掛けるラガウリの動きに合わせ身軽に飛びのいたカイトは背中に下げたハンマーを取り出すとラガウリの三撃目にあわせ、そのハンマーをぶち当てる。

「へ、どうだ!？」

「きかん...はははは、その程度では我がこの身体を打ち砕くには不足！」

口上をかけるラガウリ。だが、動きを止めたその瞬間に、

「いけ、チ口...砕け、光の十二翼！」

「はあ！」

「空間よ...切り裂けえっ!!」

「灰は灰に...行け、焰の蝶よ。焼き尽くせ。」

「戒めの拳！」

残った5人の集中砲火を受ける。

「ぐはああっ!!くう...やりおるな...」

ラガウリは身長が増大に応じて伸びた腕のリーチをいかし鉤爪を振り回すが、もともとの技量に問題があるのか当たらない。当たったとしても剣や杖(ミュージールの得物は杖です)やチ口に受けられている。刹那にいたっては届いていない。

ミュージールは初手以降は能力強化魔法や回復魔法といった後方支援にまわり、残った5人が次々と攻撃を繰り返す。だが餓鬼=ラガウリに致命傷ともなる一撃を与えているはずなのに倒れる気配は無い。

「くそ...どうなってるんだ、あいつの身体はゾンビか!？」

餓鬼となんとか戦った事のある亮は毒づく。

「餓鬼って、ゾンビと同じアンデッドじゃない。」

鏡花が即座に突っ込む。

まあ、そういう突っ込みをいれられるぐらいには余裕のある戦い 　　というか一方的な蹂躪のようなもの 　　なのだが、餓鬼=ラガウリは倒れずに暴れつづける。

「炎の魔法がかなり効いているようなんですけどね...。」

刹那に疲労の色が見える。すでに50を数える攻撃魔法を叩き込んでいるのだ。当然であろう。

戦い始めて一時間半。6人の疲労の色は隠せない域にまで達した。が、それは餓鬼＝ラガウリも同じだった。いや、ラガウリの場合すでに限界にちかいところに達していた。

「く…押し切れなんだか…。」

疲労の色の濃いカイトに始めて鉤爪がクリーンヒットする。だが、ミューゼルの手によって傷はすぐに塞がれる。

「この身体も限界か…もともとの素性がよくなかったというのにまあ、持ったものだな。」

ラガウリはさばさばしたような感じで言葉を発する。カイトにクリーンヒットした時の衝撃で腕がもげ落ちたのである。

「耐久力だけが取り得とはな…だが、あの長時間の戦いのなかでほかにこの身体のように我がつかうことができる身体の存在を嗅ぎ取る事ができた。これは収穫だったな。」

餓鬼から黒い霧のようなものが吹き出る。

「ふふふ…また会おう。相羽カイト。ミューゼル＝クラスマイン。そして 式堂兄妹。もう、おぬしたちは必要ない。この異世界で骨を埋めるがいい。」

その声を最後に黒い霧は夜の闇へと溶けていった。

「終わったのか？」

亮の言葉に答えるかのように餓鬼は膝をつき、地に伏せ、そして灰となり風によって消えていった。

「…終わったみたいね。」

鏡花はそう言うと座り込む。

「はあ…疲れた。」

カイトにいたっては寝っ転がる。

この日、世界にとって最悪の暗黒神がやってきたことをまだ誰もしらずにいる。

そして、日本連合にとって最大の悪夢がもうじきやってくる。

---

あとがきというか…。

メインメンバーの出典元は「ぱすてるチャイム」「夜が来る!」「大悪司」のアリスソフト関係なので新世紀アリス伝なんてつけてますが。

やるこたあ、真女神転生でおなじみのDDSだったりするんですね。

今のところ、DDSそのものを使用してる作家の方はいないようなので...調度いい素材だと使う事にしました。

幸い、構想のところにも言及がないのでかなり早期に完成した「魔法科学融合技術」ということで。

ちなみに「ぱすてるチャイム」は本来ならファンタジーサイドなんですが、ボス悪魔がなんであんなに頑丈かつ強力になるのかの説明にラガウリが調度いい感じだったのでこっち側に持ってきてしまいました。

それに「最大の悪夢」事件を起こすのに必要なオーバーパワーの要因にもちょうどいいし。くす。

...多分3話目になるんだけど。